京都の城にみる武士・侍の質的変化

――サムライ文化論に関する一ノート――

中西裕樹

一　はじめに

近年、国内外で「サムライ」という言葉が頻繁に使われるようになった。欧米人にとってのサムライとは、日本文化の代名詞であり、二〇〇三年配給のハリウッド映画「ラストサムライ」は「武士道」という「そのストイックで強靭な生と死の哲学」を発信するとうたった。[1] 一方、国内では、海外での活躍が期待される日本人への形容詞となり、大リーグで活躍するイチロー選手は「日本男児らしい物怖じしない言動やストイックな生き方」が「まさにサムライ」とも言われている。[2]

明治三十三年（一九〇〇）、新渡戸稲造は『BUSHIDO, THE SOUL OF JAPAN』をアメリカで刊行した。[3] これは、武士の道徳・精神に基づいて日本の思想教育を欧米に説明するもので、武士道が持つ正義や勇気、敢為堅

忍などを豊富なエピソードを通じて紹介した。「ストイック」などのイメージを抱きつつ、日本文化を理解、再認識する点においては、現代の「サムライ」の用法が新渡戸の影響を受けていることは間違いない。

新渡戸の『武士道』は、翌年に日本で英語版、やがて日本語訳が出版され、以降は国内の各方面に大きな影響を与えてきた。近年は武士道ブームであるともいい、今なお関連書籍が出版され続けている。しかし、多方面からの注目は、むしろ武士道が古来、日本に存在した精神ではなかったことを明らかにした。

国文学者の佐伯真一は、武士道の正義や勇気を語る大半のエピソードが史実ではなく、実際には謀略や虚偽が肯定されていたことを証明した。武士道とは、武士が社会的存在ではなくなった明治以降、日本の精神を求める中で構成されたものという。[4] また、倫理学者の菅野覚明によれば、近代の対外戦争の中で意識された思想であり、言葉としては新渡戸の著作が契機となり、一般に知られるようになった。[5]

さて、歴史学では、武士の歴史的性格に関して膨大な研究が積み重ねられてきた。二〇一〇年の国立歴史民俗博物館の企画展「武士とは何か」においては、その成果が画像や武具などの「モノ資料」の展示を通じて提示されている。[6] ここでは、武士とは戦士という職能を持ちつつも公家などの他者との関係の中で理解すべき存在であり、その限定的な社会的階層が中近世移行期に激しい質的変化を遂げた結果、社会的身分として成立した点などが確認された。そして、現代の武士へのイメージは長い歴史の一部を誇張したものであり、その意味を問うことが日本の「伝統」として武士を美化しがちな現代社会へのメッセージとされている。画像や武具、古文書など、いわば武士が築き上げてきた生活活動の所産、つまり武士の文化を通じた歴史背景の把握は、先述のような武士道の影響を受けた「サムライ」の言葉を使用する現代の風潮の読み解きにも有効であるように

思う。

また、武士道をめぐる言説に関しては、各時代の武士や侍の行動を同一組上で扱う傾向がある。しかし、源氏や平氏などの古代軍事貴族と、戦国時代の「村の侍」では、社会背景を受けた出身階層、人口比率が全く異なる。さらに中世国家は、公家と宗教、武家が相互補完関係にある権門体制として理解されており、[7] やはり武士が超然とした独自性を持っていた訳ではない。

そこで、小文では、十五～十七世紀の中近世移行期における、広く武士や侍と呼ばれる集団の変質について、戦士という本来の職能を反映する拠点＝城(館)の変遷を素材の中心として確認したい。城館は軍事施設という大きな性格を帯びつつ、生活や儀礼の場でもあり、武士や侍を取り巻く様々な環境が反映される場でもある。また、フィールドとしては京都を中心とする。京都は、公家や寺社などの権門が集中する首都であり、そこで大きく変遷した城は、武士の文化にみる独自性、もしくは汎用性を強調すると考えたからである。そして、非常に雑駁であるが、現代の「サムライ」文化に関する一ノートになることを意図してみたい。

二　侍の城と花の御所

現在、一般的にイメージされる城とは、水堀に囲まれた高い石垣の上に重厚な多層の天守や櫓がそびえる姿ではなかろうか。これは、現存する近世城郭の姿であり、その担い手は紛れもない武士＝大名たちである。一方、中世において、城とは文字のごとく「土から成る」ものであり、土の造成によって曲輪と呼ぶ平坦地を確

保し、切岸という急斜面や堀、土塁などを設けて、周囲からの遮断を図る防御施設であった。構築主体も武士から寺社、民衆にまで及び、建築物も千差万別となる。

そもそも中世は、様々な戦乱が社会全体を覆い、戦いを職能とする家＝将軍や守護大名らの武家だけではなく、例えば一般民衆は自己の財産や家を営むために村を形成し、共同で山野河海などの生活基盤の確保に実力行使＝武力を用いた。集落や屋敷には身を守る堀や切岸などが構えられる場合があり、これらを含めて中世日本には万単位の城館が存在したとされている。

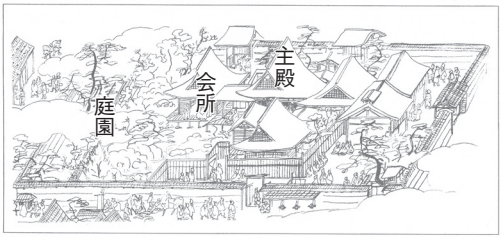
このような武力を含む村の動きをリードしたのが、土豪や侍と呼ばれた人々であった。幕府との関係を持つような公認の武士ではなく、荘園の職や土地を集積して力を強めていた階層である。彼らは守護などの武家被官となって軍事動員に応じつつ、その人的関係を「侍」と称して、他の村人よりも優位な立場を得ようとした。半面、生活の基盤や他方の人的関係からは村人の顔をあわせ持ち、領主らとの交渉や合戦において、村の利害を代表する立場にもあった。そして村の武力は、武家にも引けを取らなかった。(8)

京都近郊の事例では、永享六年（一四三四）の比叡山の強訴に対して、幕府が守護の軍勢への後方支援を京都近郊の村々に要請し、伏見荘（京都市伏見区）の人々は躊躇するもの、最終的には七人の「侍」を中心とする三〇〇人が動員に応えたという。(9) また、嘉吉三年（一四四三）の市原野（京都市左京区）の郷民と美作国守護山名氏被官による「鹿」争いに端を発した合戦は、「数百騎」の細川、土岐、赤松、六角ら有力守護による郷民への報復に発展した。ただし、市原野は放火されたものの、人的被害は逆であったとも伝えられている。(10)

村では守りを固めるため、例えば大藪集落（京都市南区）の場合、土豪と村の「年寄」らは領主の東寺と交渉

し、集落周囲の田地に堀を設けていた。[11] しかし、大半の集落では、土豪や侍らが営む約半町（五〇メートル）四方の館が要害＝館城となる事例が多い。国人という武士の拠点も同様の形態をとることが多く、物集女城跡（京都府向日市）の発掘調査では十五世紀に整備が進んだことが判明し、革嶋氏館跡（京都市西京区）は荘園政所の場を継承したものであった。[12]

敵の侵入を避けるため、これらの城には土塁や堀がめぐらされた。特に土塁は、粘土を突き固めて構築するため、塀などの作事物よりも強度や高さ、耐久性の確保しやすい遮蔽物であったと思われる。今でも土塁を持つ城館遺跡は各地に残り、村の城館ではないが山科本願寺（京都市山科区）の土塁は現状でも基底部の幅一二m、最大高九mの規模を保っている（写真1）。[13]



上：写真1　山科本願寺に残る土塁
下：図1　『上杉本洛中洛外図屏風』の将軍邸（トレース）

さて、京都は室町幕府という武家政権の拠点であり、将軍は洛中に「花の御所」という豪壮な館を構えた。この館は築地塀で囲まれ、内部には儀式や政治を行う主殿や会所、庭園を中心とした「ハレ」の場と、日常の生活に必要な施設を中心としたプライベートな「ケ」の場という空間が設けられた（図1）。征夷大将軍は武家

の棟梁であり、武士の頂点に位置している。しかし、『洛中洛外図屏風』で描かれるように、将軍の館は公家の館や寺社と調和し、一体で京都という景観を形作っていた。軍事拠点として追及された様子はなく、むしろ土塁をめぐらせた土豪や侍層の城との間に大きな差がある。その理由として、京都という首都では武家の館にも安穏という秩序が求められた結果、恒常的な軍事施設が忌避されたとの理解がある。(14)

一方、京都では、武家以外の町衆らの都市住民が上京、下京という居住空間の周りに堀や塀をめぐらせる「構」という一種の軍事施設を構築していた。これは、洛中の寺院境内も同様である。ただし、注意が必要なのは、やはり構には土塁を使用した痕跡が乏しいことである。京都では、「城」の存在に加え、付帯する土塁の使用自体が抑制されていたかのようである。(15)

また中世の人々にとって、「城」とは直接的な軍事施設の有無ではなく、反体制勢力による私的暴力の場と認識されたという。このため、秩序を乱す不穏な施設の「城」は破却しなければならず、広く罪科人の家屋には穢れや不吉を払う＝刑罰としての「破却」「焼却」が行われていた。(16) 特に国家の首都である京都において、「城」、もしくは破却が困難な軍事施設への忌避感が強く意識されたことは想像に難くない。そして、当然ではあるが、土塁は焼却できず、破却も容易ではないため、恒常的な軍事的空間＝城を否定するためには使用自体が望ましくなかったことが想像される。(17)

将軍家は、洛中に城を構えなかったが、東山連峰一帯には中尾城や霊山城などの城を構えており、そこでは土塁を使用していた。また、各地の戦国大名らの城も同様であり、武士は有効な軍事施設として土塁を十分に認識しているのである。しかしながら、各地の大名の館、とりわけ守護たちの館は、将軍の「花の御所」を模

範とし、築地塀をめぐらせた館には将軍の館と同様の空間構成が取り入れられた[18]。これは、室町幕府と全国の武士との政治秩序を具現化した「花の御所体制」として把握されている[19]。

戦国時代においても、将軍や大名らは戦う武士として、合戦の主人公であったことは間違いない。ただし、館を見る限り、そこは将軍がいる京都、すなわち公家や寺社などの諸権門との秩序が反映するものであった。このため、自らの館を恒常的な城へと変貌させる土塁を採用せず、この点において土豪や侍層による城との間にはズレがある。当該期の武士の館を見る、つまり武士を考える上では、公家や寺社などの権門との関係がむしろ大切であるようにも感じられる。ただし、この関係は次に取りあげるように織田信長を経て、豊臣秀吉の下で変化していった。

三　京都と信長・秀吉の城

織田信長は、永禄十一年（一五六八）に後の将軍足利義昭を供奉して上洛を遂げた。信長は、尾張国守護斯波氏の守護代織田家の分家という武士の家に生まれ、その拠点は戦国大名としては珍しく、支配域を拡大するごとに移転した。上洛前年には美濃斎藤氏を追い、岐阜城（岐阜市）へと移っている。

岐阜城は、標高三二九mの金華山一帯に曲輪を設けた本格的な山城であり、山麓にも巨大な石塁や御殿建築が建ち並んだ。このうち、信長は山頂の御殿に居住し、周辺は「堡塁」などが設けられる戦いの場であった[20]。戦国時代、山城に住む大名は珍しくなくなったが、家臣ともども屋敷を構えたケースが多い。しかし、信長は

限られた近親者らとのみ居住しており、城は視覚的に他の武士たちとの権力差を現す装置として人々の目に映ったとみられる。この城の機能は、安土城でより明確になった。

天正四年（一五七六）に築城を開始した安土城（滋賀県近江八幡市）では、高石垣に瓦を葺く「天主」や礎石建物、屈曲した通路と広場を持つ枡形虎口などの特徴的なプランが採用された（写真2）。このような城の形は、「織豊系城郭」と呼ばれ、豊臣秀吉を経て近世の城郭へ継承されていく[21]。標高一九九mの安土山山頂は石垣で固められた本丸となり、櫓には金箔瓦が輝いて意匠に富んだ天主がシンボルのタワーとしてそびえた。信長は、この天主に居住し、城を舞台とした様々なイベントを実施するなど、まさに安土城は信長の権威を示す装置となった。

写真2　安土城跡に残る天主礎石

一方で、信長は天正八年（一五八〇）、大坂本願寺との「石山合戦」に勝利した後に「破城令」を大和国や河内国などで実施し、従来の武士が拠点とする城や村の館城などを破却して軍事拠点の統合を一気に進めた。また、その過程では、従来は稀であった城を中心とした町＝城下町の形成に試行錯誤を重ねていく。戦国時代は、世界史的にモノと人が動いた時代であり、経済活動と港町などの場が重視されていた。信長の時代に、城郭と城下町に大きな転機があったことは間違いない。

そして信長は、京都にも城を築いた。上洛翌年、将軍義昭のために庭園や櫓を備えた「御城」の構築をはじめ、発掘調査からは総石垣の城であったことが判明している。この地は、かつて永禄二年（一五五九）頃から将

軍足利義輝が造営をはじめた「御所」の跡地である。義輝の御所は堀をまわし、同八年に義輝が殺害された時、後の軍記物では「御土居ノ四方」から敵が侵入したと記述された本格的な城であった[22]。足利将軍は、ようやく戦国の最終段階で洛中に恒常的な城を構え、その跡を信長が支援する形で義昭御所＝城の整備が進んだといえる。

ただし、信長自身が京都に構えたのは、「武者小路屋敷」や「二条屋敷」であり、本能寺などの寺院を宿舎として利用した。安土城を築く一方で、京都に土塁や石垣を備えた城を持たなかったのである。これは信長にとっての居城があくまで安土であり、城を核とした新たな都市を京都に構想しなかったためと理解されているが[23]、付言するならば、義昭御所＝城は、その没落後に破却され、以降の京都での城の存在はしばらく不詳となった。「城」を忌避する京都に「城」を構えるためには、人々の意識を変えうる立場や理由が必要だったのではなかろうか。信長の段階では将軍名義でこそ、京都にようやく恒常的な城が成立したが、その状況は従来の京都と城の関係から大きく変化していないように見える。そして、信長は本能寺という寺院に明智光秀勢の攻撃を受け、自害した。

写真３　発掘された聚楽第石垣

さて、信長の後継者たる豊臣秀吉は、天皇を補佐する関白となった後、天正十四年（一五八六）から聚楽第の建設をはじめた。聚楽第では、水堀をめぐらす高石垣の上に高層櫓群が並び、御殿建築が林立した。最新の発掘調査では、

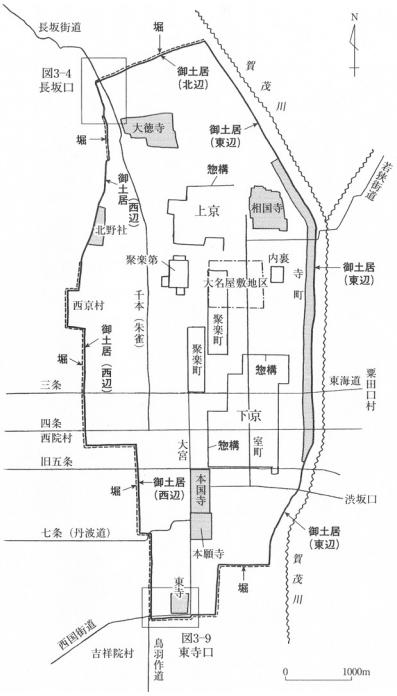


図２　御土居（注26福島論文より）

本丸の巨大石材を使用した石垣が本格的に検出され（写真3）、まさに織豊系城郭としての姿が確認されている。[24] そして、周辺には、臣従した全国の大名が妻子兼帯で住まわされたため、巨大な大名屋敷群が広がった。この新しい武家政権は、室町幕府と同じく京都を拠点としたが、「花の御所」を復活しようとした形跡は全くない。むしろ天正十六年（一五八五）には、この城に後陽成天皇の行幸を迎えている。

続く天正十九年（一五九一）、秀吉は総延長二二・五kmに及んで京都を取り囲む「御土居」という土塁と堀を設けた。土塁は、大規模な部分で基底部の幅約二〇m、高さ約五mにも及ぶが、工期は約三か月で完成したという。[25] 御土居は、聚楽第と武家屋敷地はもちろん、上京・下京という洛中の町、寺社門前など様々な周縁の町、京都への流通ルートの拠点集落を内包し（図2）、[26] 首都である京都と外部との異質さを喧伝する装置という機能が論じられている。[27]

従来、畿内の村や町では住民が居住域を囲む施設を発達させ、京都では構が設けられた。これらは惣構と呼ばれ、『日葡辞書』によれば「市街地や村落などの周囲をすっかり取り囲んでいる柵、または、防壁」[28]という

意味である。特に、山科本願寺のような寺内町では先述のように土塁が発達し、大阪平野を中心に寺内町群が成立していた。このような町のあり方は、織田信長の城下町に影響を与え、惣構内部に設けられた城は、従来の土豪や侍層に変わって住民の平和や経済活動を保障する主体であることを示したと考えられている。[29]

秀吉の御土居は、居住域を守るために土塁を使用した点で戦国時代の土豪や侍層、そして一般民衆の城と共通する。そして、軍事施設の存在を拒む京都を恒久的な軍事性を保つ空間へと転換し、その秩序の主が自身であることを宣言したといえる。この背景には、同じ武家政権といっても、室町幕府とは大きく性格が異なった点が関係するように思う。

非常に雑な理解だが、室町幕府体制下で在京していた守護大名は、大半が足利一門や名門の武士に出自し、いわゆる源氏や平氏などの古代軍事貴族の末裔であるものも多かった。中世の権門体制に収まる人々である。これに対して、秀吉の周辺は、そこには属さない、村の土豪、侍層に出自する面々が多く、いわゆる下剋上の結果、秀吉政権の成立とともに新たに武士としての地位を獲得した人々であった。諸説あるものの、その典型が秀吉自身である。

この時代に武士、侍を取り巻く大きな質的変化が起こり、その一つの象徴が京都を軍事空間と化した土塁の使用といえば、大げさかもしれない。ただし、築地塀の「花の御所」から聚楽第と御土居という織豊系城郭、そして土塁による惣構が成立した背景であることに誤りはないだろう。戦う武士の棟梁の館は、公家や寺社ら権門と協調する段階から、戦いを前面に押し出す段階へと移行したのである。意図はさておき、江戸時代以降も御土居の土塁は存在し、結果として京都は惣構という空間構造を持ち続けることになった。

さて、秀吉の時代、聚楽第や御土居のように、各地で城郭や寺院などの大規模な「公共工事」が実施されていく。戦国時代の盛んな経済活動を経て、その富と気風は城郭建築に反映した。権威を示す豪壮な建築群には、狩野派らの画工集団による豪華な障壁画や花鳥の彫刻などが施され、これらは当時の雄大な気風を現す桃山文化として評価されている。しかし、このバブルのような社会は必ずしも継続せず、徳川幕府の成立前後から、武士を取り巻く城郭などにも変化が現れる。続いては若干視点を変え、城郭建築や装飾などに反映した文化を紹介し、そこに武士や侍の質的変化を見ていきたい。

四　城と文化と徳川の「士」

秀吉は、天正二十年（一五九二）、京都南郊の伏見に「太閤隠居城」[30]の普請を開始し、文禄三年（一五九四）には城下に惣構を加える大規模な工事を実施した。これが伏見城（指月城）であり、天守や御殿建築が建ち並ぶ秀吉にふさわしい城となった。この後、後継者の豊臣秀次の切腹事件に伴って関白の城たる聚楽第を破却し、慶長元年（一五九六）の大地震を経て、城は隣接する木幡山に再建された。伏見の惣構内部には大名屋敷や町屋が建ち並ぶようになり、聚楽第に代わる政権の拠点の様相を呈していく。[31]

伏見城は、慶長五年（一六〇〇）の関ケ原合戦の前哨戦で落城したが、戦後は徳川家康が入って将軍宣下を受けた。この城の歴史は、武士たちに伏見が武家政権の所在地との認識を持たせ、二代将軍秀忠、三代将軍家光は、わざわざ伏見城で将軍宣下を受けている。なお家光以降、伏見城は廃され、その跡には桃が植えられた。

織田信長以降の時代を、安土・桃山時代と呼ぶ所以である。

さて、少し時代は遡るが、織田信長の安土城は、近世城郭への画期となり、高石垣・礎石建物・瓦が採用された[32]。ただし、この安土城は突然出現したのではなく、畿内の職人集団による個別技術を集成し、完成したものであった。奈良の瓦職人、近江の石工集団など、従来は寺社などの造営に関わってきた人々とみられる。信長は、職人集団を動員する実力を備えた後、既存技術をうまく融合させて織豊系城郭を作り出していた。これ以前にも、石垣や瓦を単体で利用した城は存在している。

安土城天主の内部は、伝統的な画工集団の狩野派の手による障壁画が飾っていた。細かな調度品なども、一流の職人の手によるものであろう。事実、安土城から出土する瓦などの遺物は、瓦当の紋などの造形も非常に丁寧なつくりであり、原料である胎土(粘土)も選ばれたキメの細かなものである。

しかし、同じ織豊系城郭でも秀吉以降、この状況が変化する。大坂城下町や伏見城下町などの瓦については、明らかに胎土は小石が混じる粗悪なものとなり、瓦当紋の原型も摩耗したものが多く、面取りがなされていない雑なものが増加する。また、粘土板の切り離しが「糸切」から「鉄線切」へと変化するのが秀吉以降であり、これは城郭などに建築物が林立するに伴って、瓦の需要が増加したためと理解されている[33]。瓦の粗悪化の背景には、大量生産と大量消費があった。

そして、城に関わる美術工芸品にも高度な技術を有する熟練職人の手だけではなく、平職人にも可能な製品が生まれていく[34]。例えば、桃山文化を代表する「高台寺蒔絵」は、豪放・華麗な作風で知られるが、その技法自体は、従来の漆を何度も塗って下地を盛り上げて金箔を施す「高蒔絵」ではなく、同じモチーフを使用する

「平蒔絵」であった。また、障壁画を描いた狩野派は、作風を確立し、分業体制によって多くの作品を製作可能な「工房化」が進んでいく。

一方、城自体に目を向けると、慶長五年(一六〇〇)の関ケ原合戦以降、徳川氏は国内支配の再編を進める過程で、諸国の大名を動員する天下普請によって畿内周辺に城郭を構築していく。加納城(岐阜市)や膳所城(大津市)などであり、慶長六年(一六〇一)には京都に二条城が築城された。この後も、篠山城(兵庫県篠山市)、名古屋城(名古屋市)などが次々と築城され、丹波亀山城(京都府亀岡市)なども大改修を受ける。

これらは大坂の対豊臣家対策でもあったが、慶長二十年(一六一五)の大坂の陣で豊臣家が滅亡して以降も、城郭の整備は続く。江戸城や大坂城では大規模改修が継続し、京都では伏見城に変わる城として、元和九年(一六二三)に淀城が築城され、二条城では寛永三年(一六二六)の後水尾天皇の行幸を迎えるに際して拡張工事が行われた。周辺でも高槻城(大阪府高槻市)、尼崎城(兵庫県尼崎市)、明石城(同明石市)が築城、もしくは大修築されている。

写真4　徳川幕府による二条城の櫓(左：西南隅櫓、右：東南隅櫓)

このように当該期の徳川による築城事例は枚挙に暇がない。それに伴って石垣に使用する石材の需要が高まり、その切り出しと加工技術が大量生産に耐えるものとなった結果、石材の規格化が進んだ。また軌を一にして建築物、特に櫓は破風などにアクセントが付けられるものの、白漆喰塗の外観を持つ統一された規格となっ

た。[35] そのイメージは、二条城の東南隅櫓と、四方が一間小さい西南隅櫓に看取できる（写真4）。

織豊期に関する城郭の絵画資料を見る限り、個別の建築物の姿は個性的である。しかし、城の規格化は、例えば織豊系城郭における陣城などの簡易な建築物の中で進行しており、[36] 出入り口にあたる虎口や城下町の構造もパターン化が進んでいた。[37] そして城は、使用する軍隊や戦争の個性を問わなくなったといえる。

また、戦国時代の末期の合戦は規模が拡大し、参加者や動員される人数が膨大になった。関ケ原合戦では、関ケ原現地だけで十五万人の軍勢がおり、大坂冬の陣では徳川方二十万人の軍勢が大坂城を取り巻いた（図3）。[38]

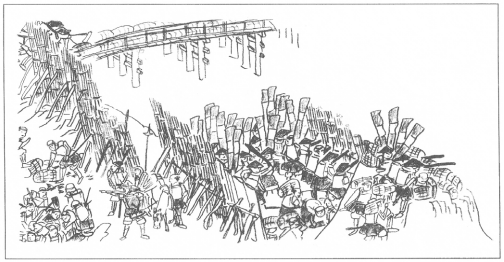


図3 『大坂冬の陣図屏風』にみる軍勢（トレース）

そこには多くの村の侍層（出身者）、さらには民衆の姿もみられ、すでに戦闘形態は弓射、打物という熟練した個人の技量に拠るものではなく、槍、弓、鉄砲を集団で使用する組織戦、物量戦へと転換していた。この転換は、着用する甲冑にも変化をもたらす。

戦国時代までの甲冑は、「腹巻」や「胴丸」という中世前期の「大鎧」を簡略化したものが主流であったが、基本構造は同じ札という小さな板を横、縦に連結させるもので製作には時間を要した。また、鎧を飾る華やかな付属品は武士の経済力を示し、個性を引き立てるものであった。これに対して、十六世紀後半には鉄板を鋲止めして製作する「当世具足」という甲冑が登場し、大量生産が可能となった。[39] 着用も容易になり、合戦図などを見ると、甲冑は各大名家の「ユニフォーム」のように見える。

大坂の陣を最後として、全国に及ぶ国内戦争は終結し、戦士としての武士は活動の場を無くす。一方、徳川将軍家が、かつてのライバルにあたる大名家の取り潰しを進めた結果、大量の浪人が発生した。戦国の遺風が残る中、以降の江戸幕府は、武力とともに「武家諸法度」などの法令や「文」による支配を進め、一六五〇年前後から山鹿素行らの儒学者、軍学者の間では武士は「士」として解釈されていく。士とは、儒教の忠・信・義などの道徳の実行者であり、戦士の姿を意識しつつも、平和な社会に武士を根付かせる「規格」となった。その姿は教育を通じ、反発を交えながらも武士の間に広まっていく。[40] 城だけではなく、武士自らも個性を失っていったのである。

戦国時代は、中世の武士に加えて、村々の侍層を巻き込む戦が繰り返され、やがて大規模化した戦争は、侍層を再編した新しい武士の政権をもたらした。しかし、その物量戦は大量生産と大量消費を求め、武士には個性ではなく、組織としての動きを求めるものとなった。大坂の陣での先駆けを譴責された徳川の武士・石川丈山が紆余曲折ののち、洛北一乗寺の詩仙堂(京都市)に幽居したのは有名な話であろう。個人の力量や主張が評価された武士の時代は、いったん終了したのである。戦いを職能とする武士を特徴づける城郭や甲冑などの変容は、まさに中近世以降期の武士や侍の質的変化を表しているように思う。

五　まとめにかえて

これまで、主に京都に関わる城、そして甲冑などの武士にまつわる文化の変化を取り上げてきた。中世京都

は、様々な権力が集う首都である一方、周辺の地域社会では武士以外の戦う人々が立ち現れた。その核を成した侍層は、天下統一を経て近世の武士社会へと参加していった。京都における城への認識と存在のあり方は、その足跡とリンクするように見えるし、城を取り巻く生産手法の変化や規格化、大量生産という流れは、天下統一前後の新しい武士の姿を映している。およそ、「超歴史的」な武士という社会的存在があり得ないことは、小文からもご理解いただけるのではなかろうか。

武士、侍、士と、その用法は時代によって大きく異なり、研究者によっても規定は異なる。また、小文での紹介事例に関しては、本来は個別に詰めるべき点を多々含んでいる。視点が多岐にわたった点を含めて、諸兄のご寛容を賜りたく、これらは今後の課題としたい。

現在の大衆文化は、「サムライ」という言葉を冠する対象の幅を広げ、ゲームやアニメのキャラクター、さらにはファッション雑誌や戦隊ヒーローのネーミングにまで及ぶ。やはり、その大半は武士道のイメージを投影するものと見受けられるが、アニメや漫画の分野では、歴史学の実証的な成果を意識的に使用するものが目に付くようにもなった[41]。武士道的な意識とは異なる用法であり、現代におけるサムライは、趣味・嗜好レベルでの歴史へのツールであることを示す。

武士や侍層を取り巻く文化の紹介は、歴史を考える素材となり、現在を知るきっかけに成りうる。小文が「サムライ」文化に関する一ノートになれば、幸いである。

注

(1) 原題「The Last Samurai」二〇〇三年ワーナーブラザーズ配給。

(2) オリコン・モニターリサーチ『第4回 世界に誇れる日本人ランキング』(二〇一一年実施)における1位のイチローに対するコメントの一つ。

(3) 代表的な訳書に矢内原忠雄訳『武士道』(岩波文庫、一九三八年)がある。

(4) 佐伯真一『戦場の精神史 武士道という幻影』(NHKブックス、二〇〇四年)。

(5) 菅野覚明『武士道の逆襲』(講談社現代新書、二〇〇四年)。

(6) 国立歴史民俗博物館『企画展示 武士とは何か』(二〇一〇年)。

(7) 黒田俊雄「中世の国家と天皇」(『岩波講座日本歴史』六、岩波書店、一九六三年所収。のち『黒田俊雄著作集 第一巻 権門体制論』法藏館、一九九四年などに所収)。

(8) 中世における村の武力と動向については、坂田聡・榎原雅治・稲葉継陽『日本の中世12 村の戦争と平和』(中央公論新社、二〇〇二年)を参照。

(9) 『看聞日記』永享六年十月二日条、同四日条(続群書類従)。

(10) 『看聞日記』嘉吉三年九月廿二日条。

(11) 小島道裕「平地城館趾と村落」(第8回全国城郭研究者セミナー実行委員会編『シンポジウム「小規模城館」研究報告編』、城郭談話会・中世城郭研究会、一九九二年)。

(12) 中井均・仁木宏編『京都 乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』(文理閣、二〇〇五年)参照。

(13) 山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち 山科本願寺と寺内町』(法藏館、一九九八年)参照。

(14) 福島克彦「洛中洛外の城館と集落—城郭研究と首都論—」(髙橋康夫編『中世都市研究12 中世の中の「京都」』、新人物往来社、二〇〇六年)。

(15) この点については、近く若干の言及を行いたい(中西裕樹「城館と都市の土塁が示すもの」『城館史料学』第八号、城館史料学会、二〇一三年予定)。

(16) 勝俣鎮夫「家を焼く」(網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫編『中世の罪と罰』、東京大学出版会、一九八三年)、中澤克昭『中世の武力と城郭』(吉川弘文館、一九九九年)。
(17) 中西裕樹「土塁からみた方形館―土塁の性格と囲まれた空間を考える―」(『城館史料学』第四号、城館史料学会、二〇〇六年)。
(18) 小野正敏『戦国城下町の考古学 一乗谷からのメッセージ』(講談社選書メチエ、一九九七年)。
(19) 小島道裕「室町時代の小京都」(『あうろーら』12号、21世紀の関西を考える会、一九九八年)。
(20) 永禄十二年(一五六九)に岐阜城に信長を訪ねた宣教師ルイス・フロイスと公家の山科言継が信長の居住形態や周辺の施設について記録を残している。松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史2 織田信長編Ⅱ 信長とフロイス』第三八章(第一部八九章、中公文庫、二〇〇〇年)、『言継卿記』永禄十二年七月十一日条など(国書刊行会)。
(21) 千田嘉博『織豊系城郭の形成』(東京大学出版会、二〇〇〇年)。
(22) 高橋康夫「織田信長と京の城」(日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』、文理閣、二〇〇一年)。「御土居ノ四方」は『足利季世記』の記述。
(23) 横田冬彦「城郭と権威」(『岩波講座 日本通史』第11巻近世1、岩波書店、一九九三年)。
(24) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「平成二十四年十二月二十四日 聚楽第跡 現地説明会資料・2」より。
(25) 中村武生『御土居堀ものがたり』(京都新聞出版センター、二〇〇五年)参照。
(26) 福島克彦「「物構」の展開と御土居」(仁木宏編『都市 前近代都市論の射程』、青木書店、二〇〇二年)。
(27) 仁木宏「「御土居」への道―戦国・織豊期における都市の展開―」(日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』、文理閣、二〇〇一年)。
(28) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳 日葡辞書』(岩波書店、一九八〇年)。
(29) 天野忠幸「西摂一向一揆と荒木村重」(『寺内町研究』四、一九九九年。のち同『戦国期三好政権の研究』清文堂出版、二〇一〇年に改稿が所収)、中西裕樹「畿内の都市と信長の城下町」(仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』、高志書院、二〇〇八年)。

(30) 『多聞院日記』天正二十年九月十三日条(増補続史料大成)。
(31) 横田冬彦「豊臣政権と首都」(日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』、文理閣、二〇〇一年)。
(32) 中井均「織豊系城郭の画期—礎石建物・瓦・石垣の出現—」(村田修三編『中世城郭研究論集』、新人物往来社、一九九〇年)。
(33) 森田克行『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』(高槻市教育員会、一九八四年)、加藤理文「豊臣政権下の城郭瓦」(同『織豊権力と城郭—瓦と石垣の考古学—』、高志書院、二〇一二年)。
(34) 注23横田論文。
(35) 北垣聰一郎『ものと人間の文化史58 石垣普請』(法政大学出版局、一九八七年)、加藤理文「徳川の城 近世城郭の完成型」(歴史群像シリーズ『決定版 図説よみがえる名城 白亜の巨郭 徳川の城』、学習研究社、二〇〇八年)。
(36) 多田暢久「織豊期城郭における軽量礎石建物について—近畿地域の陣城事例を中心に—」(『織豊城郭』第8号、織豊期城郭研究会、二〇〇一年)。
(37) 注21千田文献。
(38) 笠谷和比古『戦争の日本史17 関ケ原合戦と大坂の陣』(吉川弘文館、二〇〇七年)。
(39) 近藤好和『騎兵と歩兵の中世史』(吉川弘文館歴史文化ライブラリー、二〇〇五年)、同『武具の日本史』(平凡社新書、二〇一〇年)。
(40) 横田冬彦『日本の歴史16 天下泰平』(講談社、二〇〇二年)。
(41) 永禄三年(一五六〇)の桶狭間合戦において、数に劣る織田信長が今川義元を討ったのは、谷地形に布陣した今川勢を奇襲した結果とされてきた。しかし、実際の義元は「おけはざま山」という丘陵地に布陣しており、この通説は否定された(藤本正行『信長の戦争 『信長公記』に見る戦国軍事学』講談社学術文庫、二〇〇三年など)。近年、戦国武将を「美少女」とする漫画やアニメが増加しているが、その一つである春日みかげ原作『織田信奈の野望』(テレビ東京系列)では、この新説に基づく桶狭間合戦の描写がある。また、織豊期の武将仙石秀久を主人公とする宮下英樹『センゴク』(週刊ヤングマガジン)では、最新の発掘調査成果や歴史現場の解釈が示されている。